



## 7 歌夫（土星）

---

キリギリス星人のギリスは思う。この土星（ホシ）に、この街にやってきて何年になるのだろうか。もちろん、ギリスたちキリギリス星人の一生は、地球で言えば、春から秋までのわずかの期間である。地球人たちに比べれば時間の長さという点では、寿命は非常に短い。

ただし、寿命が長ければよいわけではない。友人のカメ星からやって来たカメ星人のカメオの平均寿命は地球人で言えば一万年で、そのカメオの配偶者のオツルであるツル星人の平均寿命は千年だそうだ。

カメオはオツルが死んだ後の九千年をどう過ごすかと最近になって悩んでいると聞いた。一方、オツルの方は、自分が死んだ後は、新しいツル星人の誰かを配偶者にして、それを九回繰り返すか、それとも、同じカメ星人の誰かを口説いて、同じ時期に天寿を全うすればいいじゃないの、と自分が死んだ後のことについてはいたって無頓着である。

俺が他のツル星人と一緒に暮らしてもかまわないのか、とカメオがオツルに尋ねれば、どうせあたしは死んでいるのよ。死んだあたしがどうすればいいの？ どうできるの？死んだあたしが幽霊やお化けになって、あなたの結婚を止めればいいの？でも、幽霊やお化けは地球人の文化でしよう？あたしたちツル星人には、死後がどうなるかなんて気にしないの。幽霊やお化けなんかもいないの。死は死でしかないのよ。地球人が死後を気にするのは、たぶん、寿命がたった百年にも満たないから、死後のことが気に掛かるのよ。千年も生きれば、それで十分じゃない。まだ、生きろと言うの。

それは、あなたたち、カメ星人も同じ気持ちじゃないの？なにしろ、あたしたちツル星人よりも九千年、十倍も長生きするのだから。もちろん、この千年も万年も、地球人の時間軸でしかないのだけれどね。あたしたちの星では、あたしたちの寿命で生きるし、あなたたちの星では、あなたたちの寿命で生きる。他の星人と寿命を比較しても仕方がないじゃない。

もちろん、千年も万年も平均寿命であって、生まれてすぐに亡くなるツル星人もいるけれどね。それはカメ星人でも同じでしょう。それこそ、運命なのかもしれないけれどね。と、長いくちばしで長い話をオツルはしたと言う。

だが、オツルの本音のところをカメオはわからない。だが、少なくとも、同属のツル星人の配偶者を求めることは嫌なのではないか。それは、自分も同じである。自分と比べられるのが嫌なのである。他の族であれば、比較されても、最初から異なっているので、気にもならない。だからこそ、お互い死に別れた際、次の配偶者はハト星人やスッポン星人のほうがいい。

と、カメオが言っていたのを聞いたことがある。

そうか。そうかもしれないが、まだ、結婚どころか、恋人もないギリスにとって、配偶者や恋人と一緒にいることの意味や実感がわからない。

今は、好きなきに、同じ種族のキリギリス星人の仲間や他の種族のコオロギ星人、スズムシ星人たちと、演奏会を開いたり、カラオケをしたりで、生を謳歌している。どうしてわざわざ、結婚などという、自分から束縛されるようなことをしないといけないのかわからない、と思っていた。

卑近な例で言えば、自分の親である。今も、この星とは遠く離れたキリギリス星に住んでいる。だが、毎日のように、テレビ電話で顔を会わせ、話すことができるので、寂しくもないし、心配でもない。

親たちがなぜ、結婚したのかはわからない。自分という存在があるのも、親たちが結婚したからであろうけれど、それが特別、ありがたいとか、困ったとか、という思いもない。自分が生まれて、親がそこにいたというだけだ。親は、自分の存在を待ち望んでいたかもしれないが、自分が生まれたのは結果論でしか過ぎないと思っている。この奇妙な感覚は、生まれてからずっと感じている。

だから、ギリスも無理に家族が欲しいとは思っていない。仲間がいたほうが楽しいときもあるけれど、静かにして欲しい、うっとおしい、自分は自分の楽しみの時間を過ごしたいと思う時も多い。

だが、そんなギリスが恋をした。それも、同じキリギリス族ではなく、虫族でもない、地球人と。

ある日、ギリスはいつものように、ライブハウスで、コオロギ星人やスズムシ星人たちとライブを行っていた。観客たちは、ボーカルのギリスの声に聞き惚れていた。その中で、ひときわ、ギリスを見つめる大きな瞳があった。その瞳はギリスの顔から体、そして声までも見続けていた。その熱い瞳にギリスも気づかずにはいられなかった。最初は、いつものようなファンであろうと思っていたギリスだが、自分を見る瞳の目力にひるまざるを得なかった。

なぜ、あの女は自分を執拗に見続けるのだろうか。うらみでもあるのか、と疑念を持っていた。だから、女になぜ、自分を見続けるのか、理由を聞こうと思った、だが、ギリスが歌を歌い終え、舞台を降り、他の仲間と一緒にフロアに戻ると、その瞳は消えていた。

舞台の上では、他のバンドのボーカルが枯れた叫び声を上げている姿しかなかった。フロアーをひたすら見回しても、その瞳はなかった。

その翌日も、その翌日も、瞳が現れた。ただし、その瞳はギリスが舞台の上にいるときだけフロアーに存在した。ギリスが、いくら早く片づけをして、仲間にお先にと行って、舞台からフロアーに戻っても、その瞳は閉ざされて真っ暗になったのか、見えなかった。

最初は、無視をしていたギリスだが、それが続くと返って意識せざるを得なくなった。女の瞳に魅入られてしまったのだ。そうなる、最後である。ギリスは出演すると、舞台の上からはいつもその瞳を捜した。そして、その瞳を確認すると、安心したように歌い続けた。ギリスが向かって右の観客に向かって歌おうが、左の観客に向かって歌おうが、目の前の観客に向かって歌おうが、一番遠い、入り口のドアの近くのスタンディングしている観客に向かって歌おうが、その瞳は常に彼の顔を見続けていた。ギリスは左ほほに、右ほほに、おでこに、のど仏に、その熱い視線を感じ続けた。

たまたま、その瞳が会場に見つからなかった時には、大いに落胆した。手をつないでいたはずの母親が急に手を放していなくなった時のように、不安で、泣き出したい気持ちになった。観客には気づかれぬようにしたもの、明らかに声量は落ち、上滑りのような声しか出なかった。

だが、フロアーのドアが開き、両肩を揺らしながら、激しい息をする、その瞳が見えた時は、ギリスは安心したのか、大きな力を得たかのように、普段以上の声量と感情が高まった声を発した。

いつの間にか、ギリスはその瞳を持つ女と暮らし始めた。その瞳を見つけるだけで、ギリスは幸福の絶頂を感じた。

だが、幸せは長くは続かなかった。寿命である。キリギリス星人と地球人では寿命が異なっていた。ギリスは地球人で言えば春から冬まで、それに比べて地球人の女性は八十年あまりだ。

秋になると、ギリスは声が衰え、舞台に立つことができなくなるほど衰弱していた。

女に見つめられるギリス。もう息も絶え絶えである。だが、ギリスは不幸ではなかった。生きている間に精一杯歌い、精一杯、魅力的な瞳を愛し、魅力的な瞳に愛されたからだ。時間の長さは関係ない。あくまでも、その長さは地球人を基準としたものだからだ。

ふと、カメオとオツルのことを思い出した。彼らは二人して、まだこれからも生き続けるだろ

うが、最後の別れの瞬間は、自分と同じではないだろうか。そんな思いが頭をよぎった。幸福の最後の瞬間は、暮らした時間の長さに関係なく、同じなのだ。

女はギリスの亡骸を地面に埋めた。寒く孤独な冬が過ぎ、春となった。冬の間、悲しみに明け暮れた女だったが、春の陽気に誘われたのか、再び、あのギリスとの思い出深いライブハウスに足を運んだ。舞台では、ギリスと同じキリギリス星人がコオロギ星人やスズムシ星人などと一緒に音楽を演奏していた。魅力的なキリギリス星人の声。女は、再び、そのキリギリス星人を熱い視線で見続けた。